

# 佐藤豊先生との出会いに深く感謝して

## A Tribute to Professor Yutaka Sato

半田 淳子 HANDA, Atsuko

● 国際基督教大学  
International Christian University

敬愛する佐藤豊先生が2020年3月で定年退職を迎えられるに当たり、僭越ながら、長年の先生のご貢献とご活躍に深く敬意を表したいと思います。なお、お許しいただけるのであれば、教員間で日頃呼ばせていただいている「豊先生」という呼称をここでも使わせていただきたいと思います。私は旧語学科時代から、豊先生の同僚として14年間一緒に仕事をさせていただきました。この間のことを思い返してみますと、どれほど豊先生にお世話になり、助けられ、ご指導いただいたかをお伝えすることは容易ではありません。以下に、思い出の一端を感謝の気持ちとともに書き記したいと思います。

私がICUに着任した2005年当時、豊先生はJLP(Japanese Language Programs)の夏期日本語教育(通称サマーコース)の主任(ディレクター)をなさっていました。当時は、語学科の教員はJLPの幾つかのコースを担当することになっており、JLPや夏期日本語教育の主任も語学科の教員から選ばれることになっていました。ご存じの方も多いかと思いますが、夏期日本語教育は7月から8月にかけて6週間、ICUのキャンパスで開催される日本語の集中プログラムで、協定校の学生を含め、その期間だけで130名ほどの留学生を受け入れています。準備には数か月がかかり、特に春休み中は応募してきた学生の選抜やコースを担当していただく教員の手配をしなければなりません。勿論、期間中は朝から夕方まで毎日出勤し、

何か問題があれば夜中でも対応しなければなりません。肉体的に辛く、精神面でも常に緊張を強いられる仕事です。

豊先生が夏期日本語教育の主任でいらした2006年度に、私は教務主任をさせていただくことになり、それが初めて豊先生のお仕事を間近に拝見する機会となりました。主任や教務主任は授業を担当することはありませんが、全てのコースの授業を見学し、授業の質が担保されるように改善すべき点は担当教員に伝えなくてはなりません。そのような時でも、豊先生は理路整然と伝えるべきことは伝え、しかしながら相手の立場も思いやり、むしろ先生方から尊敬の念を勝ち得ていました。更に、期間中は海外からの来客もあり、一度などは韓国の高校の校長先生がいらしたこともあり、豊先生は流ちょうな韓国語で対応されていました。

豊先生は常に笑顔で、冷静に状況を判断され、留学生が体調を崩し病気になった時も決し慌てることなく対処し、一方で、座禅など午後の文化プログラムの引率も積極的に引き受けくださり、夏期日本語教育を成功に導いてくださいました。大変な重労働でありながら、一度も嫌な顔をされたことがなく、愚痴をこぼされたこともありません。この点は、未熟な私と大きく異なる点です。私も、2008年度と2009年度、2017年度の3回に渡って夏期日本語教育の主任を務めさせていただきましたが、とても豊先生のようにには職責を果たすこと

ができず、今も忸怩たる思いがします。

私が主任だった2017年の夏に、英語が全く話せない中国人学生の保護者と面談することになり、対応に苦慮した私は、厚かましくも豊先生に助けを求めました。豊先生は、夏休み中であるにも関わらず、快く通訳を引き受けてくださり、無事に面談を終えることができました。豊先生には、どれほど感謝しても感謝しきれません。

豊先生は旧語学科に着任されて以来、通算で7回の夏期日本語教育の主任（文化プログラム主任を含めると8回）を担当されました。夏期日本語教育以外のJLP関連の役職としては日本語教育課程（JLP）の主任を3回なさいました。メジャー制になってからは、言語教育のメジャーアドバイザーを4年間、言語教育デパートメント長と教育学・言語教育デパートメント長をそれぞれ2年間務められました。その他にも、2007年から2年間はサービス・ラーニング・センター長を務められ、ご退職の最後の年には心理・教育学専攻主任（2018年～）に加え、アジア文化研究所長を兼任されました。このように、大学へのご貢献は数え切れません。役職というものは適任者のもとに集まるもので、いかに豊先生に対する大学の信任が厚かったかが分かります。

次に、ご研究の面ですが、豊先生のご研究を一口で説明するのも容易ではありません。日本語学の分野では、日本語と韓国語の統語形態論であり、韓国語だけでなく、中国語も堪能で、日本語と中国語の対照研究もなさっています。加えて、日本語教育のご経験も長く、日本語の第二言語習得にも造詣が深いです。英語、韓国語、中国語の3つの外国語がご堪能で、新入生向けのメジャー説明会でも、3つの外国語と日本語を比較しつつ、日本語学の奥深さや日本語教育の面白さを学生に伝えていらっしゃいました。「日本語教師を志す者は、外国語を勉強すべし」とよく言うのですが、豊先生はまさにその精神を自ら実践されていました。私などは英語がやっという有様で、豊先生の足元に到底及ぶものではありません。そのため、豊先生のもとには、日中韓の比較言語学に興味を持つ学生をはじめ、多くの留学生が指導を請うた

めに集い、日々、薫陶を受けていました。

ここで、豊先生のご経歴を紹介させていただきます。豊先生はICUのご出身で、1973年に社会科学学科に入学され、1980年に比較文化で修士号を取得なさっています。ICU在学中は、交換留学生として1年間韓国に留学生されています。その折、初めて日本語教育に興味を持ったと伺っています。中国で日本語教師をされていたこともあります。1985年からハワイ大学に留学し、1986年に日本語学でMAを取得、1993年には言語学でPhDを取得されています。その後は、北海道大学に於いて留学生の日本語教育に従事され、1998年にICUに着任されました。在職期間は、22年間を数えます。

ICUは日本語教育の分野で伝統と実績を誇る大学ですが、日本語教師の育成にも力を入れており、豊先生には日本語学や日本語教育に関連する多くの科目を開講していただきました。「入門日本語の現象」はGEコースですが、英語で開講されています。「日本語習得における諸問題」はメジャーの専門科目で、大学院の科目には「日本語学」があります。日本語教員養成プログラムの必修科目である「言語教育のための日本語学」や「言語教育のための日本語文法I,II」もご担当いただきました。

更には、学内の「日本語教育実習」やオーストラリアでの「海外日本語教育実習」（3週間）をもご担当いただきました。メルボルンの中高等教育機関での実習準備のため、5月のゴールデンウィーク期間中にはAmerican School in Japanで模擬授業をなさるほど、熱心に学生たちを指導されていました。豊先生の指導を受けた卒業生たちが、内外の日本語教育機関で教師として活躍していることは言うまでもありません。

私も日本語教員養成プログラムの一部の科目を担当させていただいていますが、それに関しまして、忘れられない思い出があります。私は2018年9月から2019年8月まで特別研究休暇を取らせていただいたのですが、その間、豊先生の奥様の佐藤ゆみ子先生（以下、ゆみ子先生と呼ばせてください）が「外国語としての日本語教授法I,II」を

担当してくださることになりました。ゆみ子先生は音声学および音響音声学がご専門で、豊先生とはハワイ大学マノア校で一緒だったと伺っています。豊先生は愛妻家としても有名で、それまでも折に触れ奥様のお話を伺うことがありました。

実は、私は前任校の東京学芸大学留学生センターで、一時、ゆみ子先生と一緒に日本語教師をさせていただいていました。ただ、その折は、豊先生の奥様とは知らず、ICUに着任してから教えていただき、とても嬉しく思ったものです。今でも、勝手に佐藤先生ご夫妻にご縁のようなものを感じております。ゆみ子先生はとても素敵の方で、何度かお目にかかってシラバスの確認などをしたのですが、その間、豊先生はいつも研究室でお待ちになっており、お二人がご夫婦として、研究者として、お互いを尊敬し大切に思われている様子を、独身の私は羨ましさを禁じ得ませんでした。

ICUは近年、外国籍の教員が増え、英語でのメールの遣り取りが日常化しました。デパートメント長というお立場から、時には同じデパートメントの教員に苦言を呈することもありました。そのような時でも、豊先生は感情的になられることがなく、いつも筋を通すのですが、そうしたことは日本語でも難しいのに、英語で上手に相手を諭される様子を、私などは「こういう時には、このように表現すれば良いのか」と目から鱗が落ちた思いで、社会人として勉強になったこともありました。

言語教育メジャーは2018年に富山真知子先生が、2019年に守屋靖代先生が、そして2020年には佐藤豊先生がご退職され、ICUに残る立場の者としては、大変に寂しく、心細い思いがしております。ただ、4月以降も、豊先生には非常勤講師として学部や大学院の科目を引き続きご担当いただくことになっており、しばらくの間は私ども後輩を教え導いていただけるものと楽しみにしています。どうか、豊先生、引き続き言語教育メジャーを宜しくお願い致します。